

第18回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和6年7月11日（木）

○会場 清水町役場別館会議室

○出席者（委員）

- ・岩崎 清悟 座長（静岡ガス株式会社元取締役会長）
- ・中山 勝 副座長（一般財団法人企業経営研究所 理事）
- ・植田 勝智 委員（ファルマバレーセンター センター長）
- ・川村 結里子 委員（株式会社結屋 代表取締役）
- ・長倉 一正 委員（有限会社長倉書店 代表取締役）
- ・三船 美也子 委員（日本親子体操協会 理事）
- ・矢嶋 敏朗 委員（日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授）

議題：総合計画の施策に対する本町の強みと弱みについて

1 将来都市像「くらしやすさで未来をともにつくるまち」について

- ・ 「くらしやすさ」や「生活に便利」は、幅広い価値観で人によって異なる。自動車の有無でアクセスの良さが変わるなど、年代によっても「くらしやすさ」は変化する。
- ・ 鉄道がないことは弱みかもしれないが、ショッピングモール、小中学校、病院があり充実しているし、町中に自然があふれている。
- ・ 民間企業が調査する「くらしやすい街」ランキングで上位にいる。
- ・ 総合計画を作る際は、全ての町民が同じという福祉の意味合いで考える。民間企業は優先順位と重要度をつけた上で施策を発想するので、行政と民間の発想にはギャップがある。

2 文化振興・特色ある教育について

- ・ 町内にオーケストラができる音楽ホールや文化施設がない。だからと言って町民が文化に触れなくてよいことにならない。自治体の壁を取り払い、三島市や沼津市の文化施設に行くことを後押しする施策があってもよい。

- ・ スコーミッシュ市（カナダ）へのホームステイは、子供たちに様々な機会を与えてくれる良い施策。子供の可能性を育む学校教育の推進として、もっとやってもよいと思う。
- ・ 台湾の苗栗市とは、中学生が相互に行き来する。スコーミッシュともやりたいと考えている。
- ・ 教育は文化の一つ。国際交流に特化など、公共教育として押し出すものがあるとうい。

3 快適な住環境の整備について

- ・ 自動車、自転車、歩行者と一緒に安全に使える道路の整備など、できることから早めに進んでいけるとよい。
- ・ 清水町は事故が多く、高齢者の事故も多い。公共交通を充実させて、自家用車がなくても動けるまちにしたい。
- ・ 渋滞が多い、幹線道路で町が二分されていることは課題である。
- ・ 古くなった建物や部屋を自分たちが暮らしやすいようにリノベーションし、快適な環境に改善するときの補助があるとよい。
- ・ 古いアパートが取り壊されて分譲されているものが多い。早期に売れているようなので需要があると思われる。借家だった人が土地を求めて定住してくれるのは、くらしやすさを感じているからではないか。

4 土地利用・農業について

- ・ 町中に小規模農地が点々と残っているのは町にとってボトルネックになる。清水町をどういう町にしたいのか打ち出しておき、そのために農地、区画整理、道路をどうするのかを考えなければならない。
- ・ 調整区域内で放置され、草で荒れた土地が将来も残っていたら、くらしやすいまちと言えない。町の形成の阻害要因になる。
- ・ 農地以外でも、高齢化で後継者がいなくなれば空き家が増えてくる。空き家も農地と同様にボトルネックになってくる。
- ・ 農家の後継ぎもだんだんいなくなってくる。相続のたび土地が分割され、ますます小さい農地になっていく。利用可能な土地に変えさせることを考えてほしい。

5 移住・定住の促進、町の産業について

- ・ 若い世代の流出人口が多いのではないかと。大学を卒業した人が地元に戻って住める環境があるとよい。
- ・ 首都圏に流出する理由として、所得格差が考えられる。ある程度の収入があれば、余裕のある生活、くらしやすさに通じていくのではないかと。
- ・ 若い世代の定住では、子育てしやすい環境、一定レベルの教育が受けられる環境が必要。高校は、三島市や沼津市など町外に出ていくことが多くなってしまう。
- ・ 移住の補助金の様子を見ると、若い人が世帯で来ることが多い。仕事はテレワークの人が多い。
- ・ 移住先として三島市の人気が高いが、そこに近い清水町や長泉町も移住先の選択肢に入れてくる。三島、沼津、伊豆と同一の生活圏であるといったアピールも大事だと思われる。
- ・ 人口が1人減ると、年間の1人当たりの消費が130万円ほど減少する。清水町で定住する人をどれだけ維持するかが税収の部分で非常に重要になる。
- ・ 町の将来を考えると、女性がこの町に来て生活する視点で考えたときに、何が町に備わっていればよいか、何が足りないかといった見方もある。
- ・ 経験から言うと、女性が清水町に転入した際に、コミュニティを作るのに苦労している。子どもが生まれ、子どもたちが学校に行くようになると、学校で仲間、コミュニティができる。コミュニティができていることで、子育てが終わった後も充実し、居心地のいい場所になることにつながっていると思う。
- ・ 移住してきた経験でいえば、どのように地域のことを知るかが大変だった。情報の取り方が難しかった。広報を見直してはどうか。公式LINEはあるが、欲しい情報がないとブロックしてしまう。
- ・ 体育館の予約方法など、町のDXを進めてほしい。
- ・ 高所得者に住んでもらう発想が必要である。どんな人に住んでもらいたいのか方向性があってもよい。それが産業政策にもつながってくるし、教育政策にもつながる。
- ・ 清水町にある先端企業を中心に産業群を広げていくと、町の特色が出せる。
- ・ 町にある商業、先端企業、ファルマバレーの医療機器といった産業を育てていく。移住施策を進めていくためには、産業がなければならない。

- ・ 今の大学生は会社の大きさやイメージを考えている。町内には国際的な企業もあるので、紹介してはどうか。
- ・ 町の大学がないので、その世代が町から出て行ってしまう。町に住みたいと思っても、勤め先がなければ戻ってこない。町内企業のことを若い人に知ってもらうことが大事である。学校の授業で、町の産業や企業を紹介する機会があってもよい。

6 観光・柿田川について

- ・ 基本目標に「観光」がない。柿田川はインバウンドの面で知られているが、基本目標や施策に柿田川の観光やシティプロモーション・移住に関する文字がない点は、大学生など将来の住民になりうる人たちにとって寂しい印象がある。
- ・ 柿田川は保存しつつ、もっと水に親しめる環境を作れないか。高齢者だと柿田川がわがまちの誇るべき資産として認識されているが、若い人は水に親しんでいない。今の保護されている柿田川は、遠い存在になっている。
- ・ 保存されている柿田川の良さをどのように見てもらい、感じてもらうのか工夫が必要である。

7 清水町こうじプロジェクトについて

- ・ 商工会中心に部会メンバーで進めていくことになった。施策 3-3「地域の資源と特長を生かした産業の振興」にも当てはまり、教育分野にも派生できる。
- ・ 町の農業とこうじが一緒になれば面白い取組ができるのではないか。